

人と馬の歴史(室ノ久保・戸鎖編)

1 室ノ久保:ここは、昔は放牧地であった。三本木・浦野館(旧上北町)・小湊方面から放牧の牛馬が来た。多い時で千頭もあり、これを集落で監視し、一頭いくらと放牧料を取った。昭和7, 8年頃でも600から700頭の牛馬が入っていて、昭和15, 6年頃までおこなわれていた。そういう関係で、部落で蒼前様を祭っており、1月19日と6月19日に祭りがあった。旧下田町の木ノ下の蒼前様(気比神社)にも、毎年1月15日と6月1日にお参りをしていた。

2 戸鎖:どこの家も牛と馬を合わせると10頭くらい飼っていた。牛馬は、野辺地町の旦那から預かり、上北町からも馬を放牧に連れてくることもあった。飼育については、戸鎖地区の総代が責任をもって引き受け、監視人を依頼して、月々の手数料を払って馬を見てもらった。放牧中に死んだ馬については弁償しなくていいが、旦那に連絡しなければならなかった。

①馬市:戸鎖地区の人たちは七戸のセリに行った。2歳馬をつれて、朝7時ころに戸鎖をたつと、千歳・甲地・水喰・二ツ森を通過して、午後4時頃に七戸に着く。戸鎖の人は七戸町新町のナカハラという宿によく泊まった。90年くらい前(昭和の初め)、馬のセリに行くと馬を16円で売り、そのお金で塩2俵買ったら、小遣銭がいくらか残らなかったという。

②馬の飼料:秋の彼岸の頃、谷地の草場に行くと草刈りをした。二オにして積んでおいて、雪が降ってからソリで運んだ。草場は御料地で、集落で借りて、それを毎戸へ分けて使用した。借り賃は上納で、集落の総代がまとめて納めた。現在の千樽地区の所が草場であった。



七戸のセリに出した馬



現在の千樽地区の風景



現在の室ノ久保地区から鷹架沼を望む

ひと うま れきし とまり で とへん 人と馬の歴史(泊・出戸編)

1 泊:馬はいなかったなので、農耕にも牛を使った。オドコ牛は農耕に使うが、オナゴベゴでも出戸集落の石川で使っていた。ココ(子牛)の頃から使って、5セ(才)になれば、また、ココととりかえた。



中山崎
海成段丘上に畑がつくられた(泊館ノ上)

2 出戸の馬ハナシ

江戸時代から出戸集落では、「馬ハナシ」が行われていた。この馬ハナシは、昭和20年ころまで行われていた。『オカの天間林、伝法寺、五戸方面から放牧に連れてきた。福岡家には、馬を連れてきた人が30人も泊まったりした。5月に出戸集落に放牧のために入ってくる馬は、2,300頭くらいあった。そのうち種馬は3頭くらいいた。4月は共有地の野火。5月になると馬の放牧を頼みに来る。頼んだ人は、お盆のころ来て、旧家に宿をとって様子を見ていく。その人たちも盆踊りを一緒に踊った。12月、馬は雪の降る頃に連れていく。米を持ってきて世話の手間賃としておいていく。しかし、放牧のための野銭は出戸集落へ払っていく。子が生まれるとその野銭も追加して払っていった。』

その後、戦後、国有地を払下してもらい、共有地として牛の放牧を行っており、昭和53年(1973)に、村の放牧地となった。



げんざい ぼくそうち
現在の牧草地とノハナショウブ



ほうのう うまぞう
奉納された馬像



で とじんじゃ てんしょうこうたいじんぐう
出戸神社(天照皇大神宮)



ほうのう うしぞう
奉納された牛像

人と馬の歴史(尾駮・二又編)

1 尾駮:旧南部藩の地誌「邦内郷村誌」に「尾駮村 馬77匹」と記されているが、明治のころにはすでに馬よりも牛が多く飼われ、馬は農耕馬として1戸当たり1,2頭、多い家では6,7頭も飼育されていた。牛馬の儀礼や行事としては、小正月には馬の餅、牛の餅と称して、馬の餅は12枚、牛の餅は10枚の丸餅をワラツトにくるんで柱に結わえ付ける。この餅は18日の「おそなえおろし」にとりおろして食べた。



昔の馬の種付け場と放牧場の位置

2 二又:馬は、乗馬用のアラブ種・ノルマン種・労役用の北海道ベリー種も飼っていた。牛は、短角と和種のメスを飼育して子を産ませた。集落の西北側(一枚橋と坂渡りの中間)にあった集落の放牧場に馬を放し、牛は、集落周辺の山野に放牧した。

馬は、2歳駒になると七戸の競市で売ったが、良馬は軍用馬として陸軍補充部に買い上げられ、5歳になるまで民間に預けられ飼育された。この家も10頭から20頭くらいの馬を常時飼育していた。馬は、4月から10月迄集落の牧場に放牧し、11月に入ると各自のマヤで飼育した。草刈り場は、春に野火を付け、種付けは4月と5月に行われた。出産は、2月から3月にかけてマヤで出産したが、集落に牧夫経験者が多かったので獣医の必要もなかった。



農耕馬の作業の様子(二又)



軍馬の放牧の様子(旧二又小学校校庭)



二又神社に奉納された馬像

※「むつ小川原地区民俗資料緊急調査報告書(一次と二次)」青森県教育委員会 昭和47・48年度より

ひと うま れきし ひらぬまへん 人と馬の歴史(平沼編)

- 1 江戸時代:「邦内郷誌」によれば、寛政9年(1794)平沼が36軒で、111足の馬を飼育している。1戸平均3足である。他の5つの集落の1戸当たりの平均は、倉内と尾駁が2足、出戸と泊が1足、鷹架は0.6足である。橋本総本家が安政のころ(1850年代)、馬100頭を所有し諸方の農家に預けていたという伝承を、裏付けるものかもしれない。
- 2 明治30年代(1897~):御料地牧野の関係者28人が御料局から平沼字追館に624町歩余を共同で借りて経営した平沼牧場には、甲地の馬牛、蛭沢の馬、天間林の牛、上市川の牛、下市川の牛、附田の馬などを春から秋まで預かって放牧した。馬4円、仔づき馬4円50銭、牛5円、仔づき牛は5円50銭で200頭余を預かった。
- 3 昭和3年頃(1928):御料地整理のため、その4割247町歩の無償交付を受け、戦後になって関係者48人に分割したため、牧野は、現在では開拓されてほとんどが農地と化している。
- 4 昭和48年(1973):大正の初年は、各戸馬牛合わせて5,6頭ずつ飼っていたが、戦後、軍馬の要がなくなり、農耕にハンドトラクターがとって代わり、集落全体でも3,4頭より見られなくなった。



平沼から新城平方面にある馬除け土手(土塁跡)



平沼貝塚(八森)の大草原から山々を望む

※「むつ小川原地区民俗資料緊急調査報告書(一次)」青森県教育委員会 昭和47年度より

ひと うま れきし くらうち ちゅうしへん 人と馬の歴史(倉内・中志編)

1 倉内

集落の周囲には放牧地域が至る所にあった。七戸の盛田牧場とのつながりで、産馬組合があった。放牧しておいて使役するとき、引いていくのである。マエダテといって、馬が子を産むと、半分は旦那にやる。自分の子馬は七戸町のセリに引いて行って売った。馬を売った金で衣料などを買ってくる。今も七戸とは縁が深い。七鞍平は農地改革後、馬が少なくなっからの放牧地である。村ではホルスタインの牛を飼ったこともある。馬を飼う家が多く、大きい家では7,8頭くらい、牛馬共で12,3頭というのも珍しくなかった。

2 中志

馬より牛が主体。馬は50年ほど前(大正の終わり)に使い馬として北海道馬を導入した。10年遅れて40年ほど前からノルマン系の馬を繁殖用として飼養し、これを使い馬にもした。集落共有の牧場は、旧中志小学校の後ろの高台にあったが、終戦後は馬の飼育をやめ、農耕地として使ったが、今は松林となっている。



倉内地区七鞍平の畑作地帯の風景



旧中志小学校と裏山